

H.キュンク 著

『キリスト教は女性をどう見てきたかー原始教会から現代まで』

(矢内義顕訳、教文館、2016年)

Kirisutokyō wa josei o dō mitekita ka: genshi kyōkai kara gendai made (Die Frau im Christentum [Women in Christendom: from the early church through the present day]). By Hans Küng. Translated by Yauchi Yoshiaki. Kyōbunkan, 2015.

本書は、一言で言うと、キリスト教会における女性史の概説である。教会の組織内で、原始キリスト教団では認められていたらしい、司牧に関わる多様な任務と役職が中世までの間に徐々に女性から奪われ、宗教改革を経て近代、そして現代に至っても、とりわけローマ-カトリック教会や東方教会においては、その状態が基本的に改善されぬままであることが、正統的な神学研究ならびに近年めざましい成果を上げているフェミニスト神学の知見を踏まえて、正確かつ厳密に記述されている。

実は、書評を執筆すべく本書を通読した後、率直に言って、当書評子は少々困惑を感じた。そのとき頭に浮かんでは消え、した思いの断片は、おおよそ次のようにまとめられる。「日本はキリスト教国ではなく、『ジェンダー研究21』の読者もキリスト教の研究者というわけではない、もしかしたらキリスト教に全く馴染みがない方の方が多いかもしれないのに、この本をどのように紹介したらよいのだろう。」これに対しては「いや、近代日本の知的構造は、圧倒的な西欧の影響下で構築されたものであり、その西欧近代の基盤にはキリスト教があるのだから、フェミニズムの立場を踏まえてキリスト教を批判的に論じた本書は、日本の知識層にとっても意味のあるもののはずだ」という反論が可能で、実際、書評子も、上の二つの間で自問自答を繰り返した。

しかし、その自問自答の間に、ふと、「自分のような立場の人間が、このような疑問を抱くのは、キュングの存在のしかた、根本的な議論の立て方に原因があるのではないか」という疑問が湧き、同時にかつて噂として聞いた次のようなエピソードを思い出した。日本人の研究者たちがキュングと議論する機会を得て、宗派を越えたエキュメニズム¹の可能性について、刺激的な発言を期待していたのだが、議論はどちらかというところ期待はずれに終わってしまった、というのだ。

キュングは、本書でも言及があるとおり、ヨーロッパで、少なくともドイツ語圏においては、教会指導部のやり方に批判的なカトリック神学者として有名であり、特に、一般信徒とローマカトリック教会当局の間に軋轢がある場合、マスコミから発言を求められることも多い人物である。

そもそもキュングは（スイス生まれであるが）ドイツ連邦共和国、バーデン＝ヴュルテンベルク州にあるテュービンゲン大学のカトリック神学の教授であり、「教会刷新」を旗印に掲げて開催された第二バチカン公会議では、新たな教会運動の担い手としてもはやされた「スター」の一人であった。そのキュングが、公然とローマカトリック教会の方針に楯突き、教会から神学教授としての認可を取り消された経緯は、本書の緒言でも触れられている。この問題は、ドイツ連邦共和国における、国家公務員としての大学教授のポストと、基本法（憲法）にも書き込まれた、「教義の教授内容は教会の決定に依る」という政教条約（教会と政府との間の協定）の条項に基づき、教会の意向で剥奪された神学教授の資格との間で、大学と州政府が教会およびキュング本人とどのように折り合いをつけるか、一般社会にも注目され、ドイツ国内では時に「キュング事件」などと呼ばれるほど、話題になった。付言すれば、本書緒言

¹ エキュメニズムとは、本来、キリスト教内部で、ローマカトリック教会、ギリシア正教会、イギリス聖公会、プロテスタント諸派が分裂している状態を、再び一つにまとめようという、「教会合同」の運動である。しかし、場合により、キリスト教の枠を越えて、他宗教との和解、相互理解の試みを指すこともある。

で触れられている「学部から独立した新しい...地位」（4頁）である「テュービンゲン大学付属エキュメニカル研究所」（5頁）所長というのが、この事件で頭を痛めた州と大学当局がキュングに呈示した答であった。

そのような経歴の持ち主であり、また、現在まで社会的発言をためらわない姿勢を維持し続けていることから、キュングのローマ・カトリック教会に対する批判は、根本的かつ徹底的なものと考えられる。本書でも、その例は繰り返し見られる。例えば、89頁：

...教皇がキリスト教徒の「父」そして「教会」（位階組織）がキリスト教徒の「母」として登場し、また在俗司祭に独身が押しつけられ、教会法の編纂が劇的なまでに大規模になったことから、...教会が権力構造と諸規範の強力な家父長化を促進したのである。いまや事態は女性を（一部は法的にも）撃退することになり、それは、ローマ・カトリック的なパラダイムにとって今日まで特徴的であり続けたとおりである。...

キュングはキリスト教の歴史を分析・検討するにあたって、原始キリスト教の時期から現代まで、六つのパラダイムを想定している。（6頁）

PI：原始キリスト教のユダヤ—黙示的なパラダイム

PII：キリスト教古代のエキュメニカル—ヘレニズム的なパラダイム

PIII：中世のローマ・カトリック的なパラダイム

PIV：宗教改革時代のプロテスタント—福音主義的なパラダイム

PV：近代の理性—進歩的なパラダイム

PIVI：近代以降に萌芽的に見えてきたエキュメニカルなパラダイムを顧慮したすべて

そして、PV以降の時期においては、教会は社会の変化についていけず、「...以前のパラダイム（PIIIであれ PIVであれ）への再統合の政策において、問題は自己欺瞞であることに気づこうとはしなかった」（158頁）と述べ、（近）現代のヨーロッパ社会においてキリスト教会が影響力を失っていることについて批判的な分析を行っている。本書のテーマである女性に対する見方に関して

も、ローマカトリック教会の根本的な誤りを、次のように明確に指摘するのだ。(161頁)

古代—中世の自然法の教説に縛られて (P III参照)、ピウス二世にいたるまでの歴代の教皇たちも、女性たちを、もっぱら彼女たちの「自然的な素質」から母親として見なし...彼らは、男性の上位に基づく、女性の一貫した不利益、頻繁に起こる女性の抑圧の本質がどこにあるのか、近代の本来的な挑戦が何であるのかに、まったく気づくことができないのである。

女性の取り扱いを含めた、公的な教会史に対するキュングの基本的な批判は、本書 42 頁の次のような記述から明確に読み取ることができる。

...今日では、神学史および教会史も、もっぱら敗者を犠牲にした勝者の立場から—教義的ないし教会政治的な観点によると—書かれたことが分かっている...とはいえ、こうした伝統的な教会史における敗者は、新しい歴史記述によって復権させられた個々の「異端」だけではない。敗者は、...キリスト教のある部分すべてに及ぶ。そしてキリスト教の「もう一つの半分」を占める敗者は...女性たちである。

このように、教会(当局)に対するキュングの批判姿勢ははっきりしているのであるが、しかし、具体的な一つ一つの歴史的位相において、というかキュングの語彙によればパラダイムにおいて、何がどのように「教会における女性の撃退」(88頁)に奏功したのかを論じる場面では、議論は学問的に公正かつ厳密に展開され、それゆえに時にかなり細かく、場合によっては、教会史や神学、哲学史に関する相当の予備知識を前提として話が進み、読者としては少々目が回ることになる。この傾向は、本書全般、各所に見られるが、ここでは中世キリスト教神学の最高峰、スコラ哲学の完成者とされるトマス・アクィナスについての記述を取り上げて、少し詳しく観察してみたい。(77—81頁)

まず、トマス・アクィナスが「中世の模範的な神学的総合を成し遂げた」人物であることが紹介され、彼の『神学大全』に女性について(否定的な)「まったく根本的な発言が見いだされる」ことが述べられる。しかし、その直後に

「トマスにとって以下の点は明白である」として示されるのは（78 頁）：

- (1) 女性も男性と同様に神の似姿として創られていること。
- (2) それゆえ、女性は、原則的に男性と同じ尊厳をもち、永遠の目的に定められていること。
- (3) 女性は、生殖のためだけでなく、共同生活のために神によって創られたこと。

という、神の前における人間としての基本的男女平等の原則である。だが、それに続けて問題の『神学大全』におけるトマスの発言が取り上げられる。トマスは「女性軽視を…強化し…女性とは、一できそこないの男、できそこないの雄」（同）であるとの「悪名高い言葉」（同）を発して、「たびたび引用されてきた。」（同）そして、女性がそのようなものであることから「女性の司祭叙階について」（79 頁）トマスは「こうした叙階が違法であるだけでなく、無効ですらあることを主張」（同）しており、「同様のことは、女性たちによる説教にもあてはまる」（同）として、トマスのこのような発言が「中世の教会における女性が語るべきことを何もたない」（78—79 頁）根拠となっていることが示される。

ところが、その直後、キュングは「これらの否定的な発言すべてについて、ただちにトマスに決定的な—否定的な—判断を下そうとするひとは、つぎの三点を考慮すべきである。」（79 頁）と述べ、要するに、女性に対する否定的なトマスの発言は、トマスのオリジナルではなく、「当時の人々（男性）が一般に考えていたこと」（同）か、「旧約聖書もしくは新約聖書に」（同）記されているか、さもなければ当時最大の「偉大な自然学および哲学の権威」（同）すなわちアリストテレスに依拠しているかに過ぎない、と説明する。最初に言い出したのでなければ、責任は軽い、と言わんばかりの論調で、この点については、まさに中世からの伝統を盾に、女性に教会での役職を禁じつつけている現代の教会当局を批判する場合と、少しく矛盾しているのではないかと思わざるを得ない。

むしろ、キュングは、女性神学史家の詳細な基礎的研究の成果に基づき、トマスに批判的な、次のような結論を示す（81頁）：

アウグスティヌスもトマスも...男性中心的な、男性に中心を置いた人間論を代表する。...男性が模範的な性と見なされ、そのため女性の本質と役割はこの性から理解される。相互に補い合う関係ではなく、位階的な上下の秩序なのである！

しかし、この結論の前後でも、キュングは「トマス・アキナスは...彼の時代の他の誰よりも、質料的な被造物の現実（身体性）がもつ普遍的な哲学的-神学的価値を高めることに貢献し、彼の師のアウグスティヌスよりも、セクシュアリティに対して肯定的な態度を取った」（81頁）という記述を「歴史的な正当性のために付け加え」（同）たり、アウグスティヌスに「はっきりと反対意見を述べ」（同）たわけではないが、「トマスはさまざまな点でアウグスティヌスの見解を訂正している」（同）と記したりしている。

思うに、キュングは同じ「男性に中心を置いた人間論」（同）の代表者であっても、自らの若い時期における放蕩の記憶から、性に強くこだわり、「『原罪』の伝染を『性行為』と結びつけ、...さらに...情欲と結びつける」（66頁）ことで、「破壊的な結果」（67頁）をもたらしたアウグスティヌスよりも、「信仰に対して理性を、恩恵に対して自然を、神学に対して哲学を、本来のキリスト教的なことに対して人間的なことを高く評価した」（77頁）トマス・アキナスの方に、より共感を抱いてしまうのではなかろうか。繰り返しになるが、キュングは公正、厳密に論を進めることに細心の注意を払っており、アウグスティヌスについても、「偉大な神学的成果は、...強調するまでもない」（64-65頁）と評価する記述をしてはいる。しかし、それに比べても、トマス・アキナスに関するキュングの記述には、弁護的姿勢が滲み出ているように見え、むしろ、ほほえましいほどである。

ただし、トマス・アキナスについてのキュングのこのような好意的論調は、単にほほえましい個人的共感から生じただけではないかもしれない、とい

うより、むしろ、この個人的共感の裏には、神学的正統性へのキュングの強い指向があるように思われる。正統普遍なるキリスト教会神学の完成者であるトマス・アクィナスであるからこそ、確かに女性への理解を欠いてはいたにせよ、不必要に非難攻撃することは適当ではない。トマス・アクィナスに対する弁護的姿勢は、そのようなキュングの判断に裏打ちされているようなのだ。なぜならば、他の箇所での記述にも、同様の姿勢が窺われるからである。

例えば、本書 38-41 頁に「グノーシス—女性たちにとっての一つのチャンス」と見出しがつけられた、2 世紀のグノーシス的な運動についての記述がある。制度化された、正統な教会において女性の地位と権利が認められなくなっていった、という説明の後、「ただし、二世紀のグノーシス的な運動の場合は別かもしれない。」(38 頁) という言葉でグノーシスの記述が始まるのだが、これは「古代後期の大きな宗教的運動の一つであり、選ばれた者たちに人間、世界そして神の秘密についての救済的な知恵を約束した」(同) と紹介される。しかし、それに続く記述は否定的な論調に終始している。グノーシスはキリスト教に危険を及ぼす存在であった、とされ、「彼らは...教会の素朴な信仰を軽蔑し、歴史に根ざしたキリストの使信を...神秘神学に変容させようとした」(39 頁) ために、その影響によって「本来のユダヤ人キリスト教的な信仰が、何でも織り混ぜるヘレニズム的なシンクレティズム〔諸宗教の混淆〕の渦に消えてしまう危険」(同) があったと説明される。

「シンクレティズムの危険は現実的だった。」(同) として上げられる「危険」は、「ひとりの神と救済者」(同) そして「父と子と聖霊」の三位一体への信仰という、正統的なキリスト教の教義から逸脱した「父なる神と並ぶ母なる神」、「父と母(あるいは妻)と子という三位一体」(同) などの異端的な概念であり、結局グノーシス派は「位階的に組織された『教会』よりも、...カリスマ的に構成された『カルト教団』だった」(40 頁) と断定されるが、この説明は、一般にグノーシス派について正統キリスト教神学で行われている通りである。

その説明の後で、「グノーシス派において女性たちは、さまざまな職務を引き受けることができた」（同）と、女性の扱いに関して、「公式の教会」（同）よりも見るべき点がグノーシス派にあったことが紹介されるが、その直後に、それが本質的に男女平等を意味するものではなかったことが述べられる。「いくつかのテキストには、女性に対する著しい軽蔑が見いだされ...女性的なものに悪魔の烙印を押しつけ、結婚を拒絶するものもある。」（41 頁）

トマス・アクィナスの場合には、正統キリスト教神学の完成者であったがゆえに、それが大きくプラス評価として勘定され、教会内での女性の地位に関してトマスの負うべき責任というマイナス評価が割り引かれる書き方がされていた。それに対してグノーシス派の場合は、丁度逆の構図になっている。キリスト教神学上異端という大きなマイナス評価があるゆえに、教団内での女性の地位に関するプラス評価が割り引かれているのである。

ローマ・カトリック教会による教会の家父長化が進んだ後、「盛期・後期中世において女性たちが、男性たちと同等であるだけでなく、より旺盛な想像力と創造性を発揮することも...あった」（93 頁）殆ど唯一の領域としてキュングは神秘主義を取り上げ、何人かの有名な（女性及び男性）神秘家の事績も紹介する。その中には教会当局から異端として断罪された人も、修道院長として高く評価された人も含まれている。つまり、中世に至り、カトリック教会体制確立によって、教会聖職の位階制度からは明確に排除された女性も、自らの神秘体験によって「神の言葉...を仲介する」（95 頁）能力を発揮することはあった、ということである。

しかし、ここでも、キュングは「神秘的な祈りの姿勢は、キリスト教徒にとって重要ではあるが...規範の資格はない。」（96 頁）と、正統神学の立場から神秘主義に批判的な評価を下す。「...聖書には、...特別な宗教的賜物を条件とする...祈りの強調も認められないからである。」（同）キリスト教徒にとって重要なことは「愛において頂点に達するキリストへの信従」（同）であり、「神秘的な祈りは...それ自体が目的となってしまうと—キリストへの信従から

逸脱することもありうる」（同）からというのだ。

書評子はここまで、「正統的なキリスト教神学」という言い方を繰り返してきた。キュングがローマ—カトリック教会からキリスト教神学の教授資格を剥奪された人物であり、その後もカトリック教会に対して明確な批判を続けているという説明と、そのキュングがキリスト教の正統神学をよりどころに議論をしている、という記述に矛盾はないのか、そもそもその「正統的なキリスト教神学」とは何か、という疑問が呈されて当然である。

本書において、キュング自身が具体的にこの「正統的なキリスト教神学」の基本を述べているのは、ローマ—カトリック的な「聖母マリア」を批判し、「真のエキュメニカル（超教派的）なマリアの像」（104頁）提案のための指針を述べている部分である。（105-6頁）

新約聖書が証言するマリアは、もっぱらイエスの母である。彼女は、人間そして母親として、イエスが真に人間であることを証言する... この証言は、新約聖書の以下の信仰と決して矛盾しない。それは、イエスの実存が、最終的には神からのみ明らかとなること、その最奥の根源を神にもっていること、そしてイエスが、信じる者たちにとって神から遣わされ、神によって選ばれた子である、という信仰である。（波線は引用者による）

上の引用中波線を施した部分は、非常にエキュメニカルな表現になっているが、基本的に「父と子と聖霊」なる三位一体の神、そして「子」なるキリストの「人」性およびキリストが「父」から遣わされ（世の罪を贖うために）苦しみを受けて葬られ（甦った）たことを信ずる、ということに等しい。正統的なキリスト教神学の基本は、この信仰であり、

これを含む使徒信条²の示す信仰である。キュングは一方で、聖職者の独身制を義務づけることによって、男性聖職者の支配体制を作り上げたローマ・カトリック体制を厳しく批判するが、同時に、神学的な議論においては、基本的に、このカトリック教会を含む、正統信仰の伝統に依拠しているのだ。

ところで、本書全体の構成を検討すると、キュングはそこに、一種決定的なズレを敢えて組み入れてしまっているように、少なくとも当書評子には見える。

それは、本書の緒言に上げられ、本書評でも始めに紹介した、パラダイムの立て方に関わる。PIからPIIIまでは、間違いなく教会史におけるパラダイムと言えよう。PIVについても、PIIIから（それに対するアンティ・テーゼとして）派生したパラダイムという意味で、同じ線上にあると認めることができる。しかし、PVについては、同じことは言えないのではないか。これは教会の外で、むしろ教会に敵対する（世俗化の）形で成立したパラダイムであり、圧倒的な力で世界を支配するに至った西欧（西洋）近代社会の基本的パラダイムである。この社会は、ただし、少なくともかつてキリスト教世界と自他共に任じ、またその後も、キリスト教と完全に絶縁してしまったわけでもない。

キュング自身、このパラダイムの「人間は自分自身の主人そして自然の主人であるという自己規定が...公式のカトリック教会の側では、今日にいたるまで否定的に見なされている」（149頁）と述べ、これがカトリック教会の外のパラダイムであることを認めている。また、プロテスタントの教会史家マルテ

² 使徒信条はキリスト教徒の正統な信仰告白として定式化されている。現在、日本カトリック司教協議会が認可している定式文は以下のとおり：
 天地の創造主、全能の父である神を信じます。父のひとり子、わたしたちの主イエス・キリストを信じます。主は聖霊によってやどり、おとめマリアから生まれ、ポンティオ・ピラトのもとで苦しみを受け、十字架につけられて死に、葬られ、陰府（よみ）に下り、三日目に死者のうちから復活し、天に昇って、全能の父である神の右の座に着き、生者と死者を裁くために来られます。聖霊を信じ、聖なる普遍の教会、聖徒の交わり、罪のゆるし、からだの復活、永遠のいのちを信じます。アーメン。

イン・グレシャトを引用する形で、プロテスタント、カトリックを問わず、キリスト教会について「教会は結局、…近代世界をせいぜい部分的にしか受け入れず、決して根本的には受け入れなかった。」（159 頁）と結論しており、PⅤのパラダイムが教会の外で生じたものであり、教会はむしろそのパラダイムに組み入れられることに抵抗した（ないし、未だに抵抗している）と認めているのだ。

本書では、六番目のパラダイムとされる PⅥについて詳しい叙述はなく、これはどちらかと言うと、将来の教会のあり方についての提言のバックボーンを成すものという扱いをされている。（169-182 頁）しかし、そのようなものとして、PⅥは再び教会におけるパラダイムと理解され、結局、PⅤのみが、教会外に成立したパラダイムということになる。キュングはなぜ、六つのパラダイムのうちの一つとして、他の五つとは異質なものをとり込んだのであろうか。

答は恐らく、そうするしかなかったから、ということになるだろう。PⅤの圧倒的に強力な人間中心的、世俗的なパラダイムは、基本的には、PⅢで完成されたローマ-カトリック教会の世界支配に対するアンティ・テーゼであると考えられる。つまり、まず、PⅢの作り出す静的な「神聖にして普遍」なる教会の支配秩序に対する、キリスト教の枠内でのアンティ・テーゼとして登場した PⅣの宗教改革-福音主義のパラダイムが、PⅢ下でそれまで抑圧されていた人間のエネルギーを解発した。次に、（むろん、ルネサンスの宗教改革以外のうねりもあるが）それによって堰を切られた世俗的な人間中心的エネルギーが爆発的な効果を発揮して、キリスト教という宗教の枠を無視して作り上げたのが PⅤの「近代の理性-進歩的なパラダイム」なのではないだろうか。キュングは「近代」とだけ言っているが、しかしこれが「西欧近代」であることは、言うまでもない。

この「西欧近代」は「世界を席卷」（149 頁）し、「科学と哲学、技術と産業、国家と社会における革命によって…途方もない成果」（168 頁）をもたらしたと同時に「結果として人類にとって未曾有の実存的な危機」（同）をも

もたらした。実のところ、キュングの全活動は、PV下で影響力を失ったキリスト教会存続の可能性をあきらかにすることと同時に、近代のもたらした「非人間的な要素と破壊的な影響」（169頁）に対して闘いを挑み、克服する道筋を探求することに捧げられている。その努力の根底には、PⅢからの歴史的必然としてPVが生じたという認識と、それが世界にもたらした結果に対する、キリスト者としての責任意識があるように思われる。つまり、別の言い方をすると、キュングにとっても、ヨーロッパ近代（以降）の社会は、かつてキリスト教世界と自他共に任じ、また、キリスト教と完全に絶縁してしまったわけでもない社会であり続けているのではないだろうか。

およそ以上のような事情から、キュングは、キリスト教会の歴史を記述するにあたって想定したパラダイムの中に、教会外で成立した「PV：近代の理性-進歩的なパラダイム」を、しかもかなり決定的な重要性を持つパラダイムとして組み込んだのではないか。書評子はそのように推察している。そして、最初の部分で述べた「困惑」や、刺激的な議論を期待した日本人研究者が味わったという「失望」は、ここで推察したキュングの姿勢と深く繋がっているように思うのである。一言で言うと、キュングはあくまでもキリスト者であり、しかも、教会内に留まることを選択するキリスト者である、ということになるだろう。

1980年代から90年代にかけて、書評子は同僚二人とともにキュングが友人かつ同僚であったヴァルター・イェンスと二人で発表した著書（ヴァルター・イェンス/ハンス・キュング『文学にとって神とは何か』新曜社、1988年）を翻訳したことなどから、キュングに二度ほど会って話をする機会を得た。当時、穏やかながらはっきりと、「私はルターであるよりもエラスムスでありたい。」と語り、微笑を浮かべたキュングの顔をはっきり覚えている。

本書に戻って付け加えれば、神学者として名高いキュングが、自らの研究所におけるプロジェクトとして「女性とキリスト教」をテーマに取り上げ、女性研究者を支援したこと、それだけでなく、自著においてもキリスト教会内の

女性問題を正面から取り上げ、発表したこと、そして、その中で、フェミニスト神学を中心とする多くの女性研究者の研究成果を紹介していること。これらは、フェミニズム研究の社会的認知と定着にとっても、重要な貢献であったと言える。

200 頁に満たない小著ではあるが、教会史や神学、哲学史の深く十全な知識を要求される本書が、最適の訳者を得て翻訳されたことは、大変喜ばしい。詳細な注があるとはいえ、決して優しくはない内容ではあるが、訳文は大変読みやすく、多くの読者に届くことを書評子としても衷心から願っている。

なお、訳者は著者名のカナ表記を「キュンク」としておられる。これは原綴の/ng/が日本語の「グ」で示される濁音ではない、ということからの表記で、一つの見識である。ただ、標準ドイツ語では/ng/は [ŋ] という鼻濁音を示し、書評子はこれを「グ」と表記するのが比較的間違いのない発音再現の可能性を確保するように思うので、敢えて原稿中では「キュング」と表記した。これはどちらもあり得る表記なので、その点に読者の注意を喚起するのも悪くはないかとも考えた結果である。